
「アートワールド」はいかにして物語られるか——アーサー・C・ダントーの初期芸術哲学と初期歴史哲学の統合的解釈

田中均(大阪大学)

本発表は、アーサー・C・ダントーが論文「アートワールド」(1964年)で提示した初期芸術哲学を、彼が著書『歴史の分析哲学』(1965年)で展開した初期歴史哲学を参照して読解することによって「アートワールド」概念の解釈上の問題に取り組む。

コールマンとヒギンズの論文「アトミズム、アート、アーサー」(1993年)によれば、ダントーの哲学は、哲学と非哲学を峻別しさらに哲学の各部門を細分化する「原子論的」な立場から、歴史的な文脈を重視する「全体論的」な立場に移行したとされ、この移行が「ヘーゲルの転回」と呼ばれる。この図式では、初期歴史哲学は「原子論的」時期に、そして初期芸術哲学は「全体論的」時期への移行過程に配分される。

ダントーの「ヘーゲルの転回」について論じた最近の研究である、カスカレスの『アーサー・ダントーと芸術の終焉』(2019年)でも、ダントーの初期芸術哲学と初期歴史哲学は別個に扱われ、統合的な読解はなされていない。

しかし、論文「アートワールド」と著書『歴史の分析哲学』は発表時期が近接しており、どちらも芸術史について論じているという共通点がある。本発表は、『歴史の分析哲学』は論文「アートワールド」に方法論的基礎を提供しているという仮説を立て、検証するものである。

本発表は特に以下の問題に注目する。ダントーは「アートワールド」概念を「芸術理論の雰囲気と芸術史の知識」と規定しているが、これは作者自身が作品の制作時点で前提としていたものか、それとも、過去の芸術作品について語る後世の主体が、自らの持っている概念や知識をその作品に適用して構成するものなのか。この点は論文「アートワールド」の記述だけでは明瞭にならない。

ダントーは『歴史の分析哲学』で、歴史家の仕事とは過去の出来事を相互に関連付けて構造化し、出来事に意味を見出すことであるとして、この構造を「物語」と呼ぶ。彼によれば、歴史家は自分が叙述する物語の証拠として、史料を用いるだけでなく、「芸術」や「芸術家」のような概念も用いるが、概念は歴史を通じて変化するため、歴史家は自分が用いる概念を史料的証拠によって修正したうえで過去の出来事に適用せねばならない。

こうした議論をふまえると、過去の芸術作品に関して語られる「アートワールド」とは、後世の主体が、自分の保持している概念を修正しつつ適用することによって、作品制作当時の芸術理論と芸術史的知識を再構成しようとする試みの結果であると定式化できる。